

優秀賞

【学校経営】

防災宿泊行事を通して、 学校・地域の活力を高める

大阪府高槻市立樫田小学校

にしむらひろき
西村 大樹



1 はじめに



自然豊かな高槻市北部に位置する大阪府最北端の小学校である本校は『地域とともにある学校』として、創立から150年の歴史がある小規模校である。その歴史の中で、地域に支えられながら、地域社会における文化センターとして重要な役割を果たし続けてきた。しかし、樫田小学校区の児童は減少し、地域の高齢化が進み社会構造が重層化していく中で、地域社会における文化センターとしての価値が希薄化していくことが長年の大きな課題となっていた。そして、VUCA（不安定、不確実、複雑、曖昧）の時代と言われている現在、社会構造はより高度化、複雑化する中で、人口減少や少子高齢化などの地域の抱える課題は大きくなっていく一方であるが、未来志向の実践を創造していくことをめざして、「仲間とともに未来を創造する子どもを育む」という学校目標のもと、学校運営をしている。

そして、本校は「豊かな自然に恵まれた環境と少人数のよさをいかし、地域と密接に連携しながら

様々な教育活動を展開している学校」として、平成15（2003）年度より特認校制度を導入して、現在も通学区域外からの入学や転学が可能になっている。令和6（2024）年度は全校児童53人のうち、44人が特認校制度を利用して本校に通っており、地域社会の文化センターとして重要な役割を果たし続けることができている。



これまで地域と連携して取り組まれてきた行事は多く、「幼・小・地域大運動会」「地域交流発表会」は大きな2つの行事として取り組まれてきた。「幼・小・地域大運動会」は隣接している幼稚園（現在は休園中）と地域との共催という形で長年取り組まれてきている。また、「地域交流発表会」では、全校児童によるミュージカルを発表しており、地域の方々や保護者などたくさんの参観者を迎えて実施している本校の中心となる取組みとなっている。

その行事に加えて、学校教育目標である「仲間とともに未来を創造する子どもを育む」ことをめざして、今年度より地域・保護者とともに新たに「防災」をテーマにした行事に取り組むことにした。

2 | 防災サマースクールに取り組むにあたって

(1) 取り組むきっかけ

令和5（2023）年度に高槻市市民防災協議会主催で「榎田地域防災ワークショップ」が地域住民の参加のもと、年間5回のワークショップが実施された。榎田地域は平成30（2018）年の台風による大きな被害を経験しており、榎田地区に通じる主要な道路が通行できなくなるなど、生活に大きな影響を受けた。当然、学校も大きな影響をうけ、他校の教室を借りて学校を再開するなどの運営を余儀なくされた経験がある。

その経験から「地域のみんなで助かるために～榎田地区のマイルールを考えてみませんか?～」というテーマで、コミュニティタイムラインを作成し、そこから個別避難計画を作成することが目的とされていた。そしてその個別避難計画を集めて地区防災計画を作成していくことで、地域独自のルールができ、災害によって誰も犠牲を出さないということをめざすというものだった。わたしはそのワークショップに学校代表として参加する機会を得ることができた。ワークショップに参加する中で、地域の方々の経験や思いを知ることができた。榎田にある5地区でもそれぞれ被害状況はちがったため、当時の対応については地区ごとで大きく異なっていたことも具体的に知ることができた。このワークショップに参加させていただいた経験から、災害によって孤立する可能性のある地域にある学校で、「防災」について学びを深める取り組みが重要であると考えた。



榎田地域防災ワークショップ

また、これまでPTAの取り組みとしてサマースクールという学校に宿泊をする催しがあり、子どもたちが学校に宿泊するためのノウハウや必要な物品等があったため、その催しを学校行事にして「防災」をテーマにすること

で計画を進めていった。

(2) 大学生との連携

本校で地域の大切な文化的拠点となっている榎田小学校に関わる人が増えると、榎田地域の「関係人口」（定住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々をさす【総務省による】）を増やしていくことにつながるのではないかと考え、学校とつながる人を積極的に増やそうと、ゲストティーチャー等、地域の方々にとどまらず、多くの方に関わってもらうことができるようカリキュラムを創造している。

これまで本校に長く関わっていただいている方々を含めて、榎田小学校の応援団として関わっていただける地域外の方々が増えている実績があることは本校の強みである。その結果、多様な人に榎田小学校を通して「榎田」のことを知ってもらうことができおり、今後も小学校へ関わる人をさらに増やしていく可能性はまだまだ大きくあると感じている。

表1にある取組みは代表的なものであるが、各学年に応じて、地域にある施設（高齢者施設、障がい者施設）との交流も実施することができしており、施設職員と施設利用者に関わっている。特に施設利用者の方々との交流では、同じ榎田地域で生活をしている仲間という意識を大切に交流をしている。そして、高齢者施設の職員には外国人技能実習生がおられ、多文化共生の観点で、その方たちをゲストティーチャーとして招き、子どもたちの学びにつなげることもできている。

また、その他にも地域外の方々に関わっていただいている取組みでは、地域の米を使用したどぶろくづくりの話を聞いたり、高槻市の飲食関係の仕事（和菓子、米粉パン、カレー等）に携わっている方々をお招きして、実際に調理等をおこなったりすることなどができている。さらに、企業や高槻市の職員等による出前授業も積極的に活用している。

そこで、今回の防災サマースクールをきっかけ

表1 ゲストティーチャーとして関わっていただいている代表的な取組み

対象学年	地域の方々に関わる取組み	対象学年	地域外の方々に関わる取組み
全学年	学習田(米づくり)	全学年	ミュージカル
全学年	しいたけ栽培	4・5・6年	篠笛づくり・演奏
全学年	樫田音頭	5・6年	トマトづくり
5・6年	昔の農機具・道具	3・4年	寒天づくり
6年	陶芸	5・6年	木工
全学年	しめなわづくり	1・2年	養蜂

として、さらに学校に関わる人の幅を広げるために、大学生に焦点をあてて取組みをともに創造することをめざした。防災サマースクールの企画・立案・実施をするため、校務分掌に防災宿泊学習実行委員会を位置づけた。

そのうえで、高槻市で実施されていた防災イベントに、大学のサークル活動として参加していた大学生へのアプローチを試みた。防災サマースクールの計画を伝えたところ、積極的に参画したいという大学生が集まることになり、防災宿泊学習実行委員会と連携しながら進めていくことになった。地域の少子高齢化が進む中で、特に若年層への関わりへと広げるために大学生と取組みを創造していくことは、まさに「学校」と「地域」の未来を創造していく取組みにつながると考えた。

3 | 防災サマースクールの実施

防災サマースクールは2日間の日程で計画を進めた。次の3点を踏まえて計画を立てた。

- ・学校行事として、高槻市が進めている防災安全の取組みを具体的に実践する。
- ・樫田地区防災ワークショップの取組みの成果を学校教育活動とつなげる。
- ・子どもたちが防災に関する意識を向上させ、行動につながる知識や技能を獲得する。

日程については、学校、地域、保護者、大学生、市(危機管理室・市民防災協議会)と連携をとりながら計画を立てることができた。地域と大学生とは何度も打合せを経て、計画を整理させ、充実させていくことができた。

特に、地域が市民防災協議会との連携の窓口になっていただくことで、当日のワークショップの内容を充実させることができた。また、食事の際に使用した炊き出しをした釜は実際に避難所が開設されたときに使用する予定の地域の備品を使用することができた。そして、18人参加することになった大学生の宿泊場所として、地域のコミュニティ施設を使用させていただくことができた(子どもと接点がなく、これまで関わりもなかった大学生も宿泊で参画することになったが、保護者からは子どもと同じ空間で宿泊を許可することに不安を感じるという意見もあった。結果的には地域の施設を使用することで、その不安を解消することができた)。実施することができた主な活動内容は表2の通りである。

表2 防災サマースクールの主な活動内容

1日目	2日目
防災学習[教職員・大学生]	朝食：炊き出し[保護者]
地震避難訓練[教職員]	避難所でできるレクリエーション[大学生]
危険・被害箇所さがし[大学生]	マイ・タイムライン作成[大学生]
防災ワークショップ[大学生・市民防災協議会]	防災クイズ大会[教職員]
夕食：非常食体験[保護者]	ふりかえり[教職員]
キャンプファイヤー[児童会]	※[]が企画・立案・実施

子どもや保護者に提示したねらいは、次の通りである。

- ・災害を想定し、体験することで防災への関心、意識を高める。
- ・自然災害について学び、災害時に自分ができる行動について考える。

【防災学習】

低学年・中学年・高学年に分かれて防災学習の授業を実施した。それぞれ2時間の授業を行い、大学生が作成した学習指導案をもとに授業を実施した。まずは、学年に応じた動画を活用しながら、地震に対する防災に関する授業を実施した。その後、低学年は「防災カルタ」「防災まちがいさがし」、中学年は「防災カルタ」「防災クロスワード」、高学年は「備蓄倉庫を活用したワークショップ」「ドローンの実演」に取り組んだ。大学生が工夫した内容で、子どもたちは興味・関心をもちながら取り組むことができていた。



防災まちがいさがし



備蓄倉庫

【地震避難訓練、危険・被害箇所さがし】

地震を想定した避難訓練を実施した。避難後の集合場所を体育館にして、檜田小学校が孤立したという想定で、これから2日間さまざまな防

災に関わる学習に取り組んでいくことを共有した。

避難訓練後は、大学生とともにグループで校内にある危険・被害箇所を探しながら確認していった。校内には避難訓練で体育館に集まっている間に、危険と考えられる場所や被害が想定される場所に大学生が準備した掲示物を貼ってもらい、それを見つけていくという活動になった。「水槽が落ち、割れたガラスが飛び散っている」「ドアがゆがんで開けることができなくなっている」「人が閉じ込められている」「本棚が倒れている」などのポイントをみつけて、子どもたちはさまざまな危険や被害が考えられることを知ることができた。



危険・被害箇所さがし

【防災ワークショップ】

体育館において、大学生と市民防災協議会のメンバーを中心に7つの防災について学ぶことができるブースを用意していただいた。子どもたちは縦割りの6グループで、順番にまわり体験をしていった。準備したブースは次の通りである。

- 防災スリッパづくり：新聞紙を活用して簡易のスリッパを作成する。
- 防災ボトルづくり：安価で簡単にそろえることができるもので、常に持ち運びすることができるボトルの内容を考える。
- 簡易ランプづくり：どの家庭にもある「サラダ油、アルミホイル、ティッシュ」のみを活用して非常用のランプの作り方を知る。
- ロープワーク：さまざまなロープの結び方を学ぶ。

- マンホールトイレ：実際に設置されたマンホールトイレについて知る。
- 応急手当：心肺蘇生の実演を通して方法を知る。
- 防災グッズの展示：さまざまな防災グッズを知る。

子どもたちは7つのブースの体験をした後、危機管理室より用意していただいた段ボールベッドの作成に全員で取り組んだ。6年生児童の数である11台用意していただくことができ、大学生にも協力してもらいながら、作成することができた。6年生のこの段ボールベッドを実際に利用して宿泊を体験することができ、貴重な経験となった。



マンホールトイレ



応急手当



防災スリッパ



防災グッズ



防災ボトル



段ボールベッド設置



簡易ランプ

【食事（夕食・朝食）】

夕食については、保護者の企画で家庭に備蓄している非常食を持ち寄り、食事を実施した。電気は使えないことを想定して、それぞれ持ち寄った食事は多様なものがあり、互いに見合うことができ、新たな発見をすることができた。また、保護者からも「備蓄はしていなかったのに、持っていく非常食を子どもと一緒に選んで購入することができ、よい経験になった」「他の家庭の非常食を見て、気づきや発見があり、今後、備蓄しておく非常食を考える参考になった」などの意見があった。

また、朝食に関しては、支援物資が届いていない状況を想定しながら、地域自治会が所有している道具を使用して、炊き出しを実施していただくことができた。「白飯、みそ汁、漬物」を用意していただき、中庭にブルーシートを敷いていただくことができた。たくさんの保護者が積極的に参画する姿がみられた。



夕食



朝食

【避難所でできるレクリエーション】

公益社団法人「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」によると、「子どもたちは、非常時こそ、『遊

び』を通して自分たちの力を取り戻します。特にストレスを抱えた子どもたちにとっては、『遊び』が、日常性を回復するために大きな役割を果たします」とある。そのことを踏まえて、避難所の限られたスペースでも楽しむことができるレクリエーションを体験することにした。

大学生が企画、進行をし、道具を使わずに少人数でできる「伝言ゲーム」、避難所に設置されているものを使用した「スプーンリレー」、エコノミークラス症候群対策の「音楽に合わせた体操」を実施した。子どもたちだけでも一定時間過ごすことができる遊びを楽しみながら経験することができたことは有意義であった。



スプーンリレー

【マイ・タイムライン作成】

「みんなが学校にいるときに、大きな地震が起きたよ。家族と連絡がとれなくなった。電車もバスも使えなくなってしまった。どうやら家も危険らしい。家族が合流するまで、どのように行動すればいいか考えてみよう」という設定で、保護者や大学生とともに一人ひとりの防災行動計画を作成した。表3の用紙に自分自身がとる防災行動を時系列で整理をし、自分の命を守る避難行動について考えることができた。

これは「檜田地域防災ワークショップ」において、地域の方々がそれぞれの家庭のマイ・タイムラインを作成していたことを参考に実施することができたものである。

保護者からは「マイ・タイムラインを作るときに、子どもがずっと『とにかく先生の話をしきょうに』とだけ言っていたので、そうではなく、先生がい

表3 マイ・タイムライン

みんなが学校に ^{がっこう} いるときに、大きな地震 ^{おお じ しん} が起きたよ。家族 ^{かぞく} と連絡 ^{れんらく} がとれなくなった。電車 ^{でんしゃ} もバスもつか ^{つか} えなくなっ てしまった。どうやら家 ^{いん} も危険 ^{きけん} らしい。家族 ^{かぞく} が合流 ^{ごうりゅう} するまで、どのように行動 ^{こうどう} すればいいか考えてみよう。						
家族 ^{かぞく} の名前 ^{なまえ}	()	()	()	()	()	()
いつもいる場所 ^{ばしょ}	榎田小学校 ^{かし だしょうがっこう}					
地震発生 ^{じ しんはっせい} ～30分 ^{ふん}						
地震発生 ^{じ しんはっせい} 約2時間後 ^{やく 2 じかんご}						
家族 ^{かぞく} が 合流 ^{ごうりゅう} するまで						
合流場所 ^{ごうりゅう ばしょ}	【					】



マイ・タイムライン作成



防災クイズ大会

ない状況のときもあるので、まずは自分自身でその時の状況を把握することを伝えるようにします」や「マイ・タイムラインの記入では、初めて本気で被災時のことを想像し、どう動くべきかを考え、貴重な体験ができました」といった感想をいただき、保護者とともに主体的に考える機会になった。

【防災クイズ大会】

2日間の活動に関連した内容から教職員がクイズを作成した。そのクイズを使って、縦割りの

グループのチーム戦で大会を行い、得点を競い合った。学びを振り返りながら、チームで相談もしながら、タブレットを使用して解答していくことができ、大いに盛り上がった。クイズで楽しみながら2日間の活動を振り返った後は、個人でシートを活用して、それぞれの学びを振り返ることができた。

4 | 防災サマースクールを通して

(1) 保護者アンケートの結果から

保護者には、自由記述式で防災サマースクールについてのアンケートを実施した。多くの感想や意見を書いていただくことができた。代表的なものが次の通りである。

- ・防災という今とても大切なことをテーマに行ってください、本当に親子ともどもよい経験になりました。
- ・自分が小学生のころに経験したかったと思いました。
- ・とても充実した内容でよかった。みんなで泊まることができ、子どもたちは楽しそうでした。
- ・親子でいろんな非常食を探したり、どうしたら食べられるか考えたり、いい機会になりました。子ども一人でできるだけ安全にどう食べるかを考えることができました。
- ・防災の学びと子どもたちの楽しみが一緒になっていてよかったと思います。
- ・こんなにしっかりと防災について知る時間はなかなかないので、とてもよかった。子どもが楽しく学べて頭の中に入っていた様子だった。
- ・親子で学べて、意識を高める大切な機会でした。今後、防災についてもっと広い視野で楽しめる企画を期待しています。

これらのように、子どもの学びにつながったと実感できたという肯定的な感想や意見を、多くいただくことができたことは大きな成果といえる。次年度以降につなげていくことができる。

そして特に今回の取組みを実施していく中で、ポイントとなると考えていた大学生の参画についても、次のような肯定的な感想が多くあった。

- ・先生や保護者とはちがう、年の近い大学生の方と一緒に考えたことが、子どもには

すぐく印象に残っていて、貴重な経験ができました。自分も子どものころに今回のような経験をしてみたかったです。

- ・子どもたちは楽しく学べたようで、大学生との交流もうれしそうでした。
- ・学生が積極的に関与して、進行してくれたのがとてもよかった。
- ・学生のみなさんの説明がすごくわかりやすかった。子どもたちをたくさんサポートしていただきありがたかった。
- ・大学生が参加してくれたことにより活気のある行事になった。
- ・子どもたちも楽しそうでありがたいです。大学生のみなさんにも感謝します。
- ・大学生や地域の方、先生、保護者が協力できて、すてきな行事でした。

(2) 子どもたちの振り返りから

次にあげるように、子どもたちの振り返りからも、大学生の参画に関する記述が多くみられた。

- ・わたしたち小学生のために大学生がいろいろなことを考えて、いっしょに活動してくれてとてもうれしかったです。(6年生)
- ・大学生に教えてもらった新聞スリッパの作り方を家族に教えて作りました。(5年生)
- ・大学生がやさしくかかわってくれてうれしかったです。(3年生)
- ・はじめての防災サマースクールでいろいろなことが知れてうれしかった。いっぱい大学生が来てくれてうれしかった。(2年生)

子どもたちにとっては、年齢が近い大学生との関わりは、自分の気持ちを表現しやすく、まろくと受け止めてくれる感覚をもつことができたことから、スムーズにコミュニケーションをとることができた。大学生が学校教育活動に関わることは、学校を活性化させることができる実感を得ることができた。

5 | おわりに

(1) 児童の変化

本校には「全校スピーチ」という取り組みがある。1人で全校児童を前にして、国語で学んだ内容を発表し、その発表に対する他の児童の質問に答えていく取り組みである。小規模校である本校の児童が、多くの人の前で発表する経験を保障することを目的に始まったこの取り組みは、子どもたちの自信につながり、自己肯定感を高めることができている。

防災サマースクール後に発表をした2年生では、国語の「あったらいいな、こんなもの」の単元の学習内容とつなげた発表だった。国語の学習の中で、自由な発想から「今はないけれど、こんなものがあったらいいな」と思うものを絵に描いて、その理由とその性質を文章でまとめた。2年生児童10人のうち、3人が「防災」や「安全」に関わる内容のものをを選び、発表した。

わたしがあつたらいいなと思ったものは、じしんにおきたときにかつやくします。きょだいロボットです。じしんがあつたところに、どこでも行けます。顔があるのは、大きなじしんがきたらまもることができます。よこから手もでできます。みんながとまることができます。へやには水とジュースとアイスがあります。おふろにはいれます。びょういんもあります。大きさはマンションより大きいです。



全校スピーチ

この児童のように、明らかに防災サマースクールで経験したことから発想したアイデアが元になっており、経験したことから話題を決め、伝えるために必要なことがらを選ぶことができた。全校スピーチを参観していた保護者からも「防災サマースクールの成果があらわれていますね」という感想もあった。「学び」のつながりと広がりを実感することができた。

(2) 学校の変化

次のように保護者アンケートの中で、特に備蓄に関する意見や質問もいくつかいただくことができた。

- ・小学校で孤立した場合、どれだけの備蓄があるか知っておきたい。また、地域的に陸の孤島となりやすいため、対応できる十分な備えをしておいてほしい。
- ・道が遮断され学校まで迎えに来られなくなった場合、何日くらい学校で避難できるのでしょうか。食料も何日分くらい大丈夫なのか知りたい。
- ・小学校で避難することになった時、どのくらいの時間や期間そこにとどまることができる備蓄があるのか知りたい。
- ・学校が対応できる範囲の限界を知っておきたい。

このような意見があったことは、今回の防災サマースクールを実施したからこそその気づきや疑問も生まれてきたと捉えた。そこで、まず学校としてできることを検討した。

そして、学校から次のようなお願いをした。

学校から配付する段ボールに、各家庭で3食分の非常食を入れて学校に持ってきてください。

学校で使用がなかった場合は半年ごとに持ち帰ります。中身の期限等を確認して、必要に応じて入れ替えてください。

学校から配付する段ボールのBの面に学

年、名前、学校に持ってきた日付を記入してください。○月○日まで用意して児童に持たせてください。なお、持ってきた非常食については、学校でまとめて保管します。

学校には防災非常食として、市から配付された「非常食用のカレー（給食カレー）」が1人当たり1つ分のみ備蓄されている。飲料水も1人当たり2本程度は備蓄されている。しかし、学校に備蓄されている飲食はこれのみである。

そこで、防災サマースクールの経験を生かすことも踏まえて、各家庭で児童用の非常食を準備していただき、学校に保管することを提案することにした。

学校が孤立したことを想定して、学校で1日過ごすことができるように3食分を段ボールの箱に入れて保管している。各家庭における非常食の保管についても子どもとともに考えることができる機会となると考えた。そして、本校には食物アレルギーの対応が必要な児童が複数人いることもあり、家庭で選び持ってきたものであれば安心して使用することができるメリットもあると考えた。

(3) 地域の変化

地域の方々には、いつも学校の教育活動に対して、あたたかく協力的にサポートしていただくことができていたが、防災サマースクールの取組みに対して多くのサポートをしていただくことができた。防災サマースクールに当日の参加も含めて参画していただいた地域の方々からも、充実した取組みになったことに対して、「学校と保護者と地域が一緒になった活気のある取組みになってよかった。地域も元気がもらえる」などといった肯定的な感想をいただくことができた。地域とは、学校・保護者だけでなく、大学生や行政が参画して取組みをすすめることができたことに対する意義や成果を共有することができた。

「関係人口の増加」というキーワードを意識し

ながら取組み全体をコーディネートすることができた。すぐに地域まで影響を与えることは難しいかもしれない。しかし、学校のことを知り、関わる人を増やしながら、それを発端として学校に活力をもたらすことは、「地域とともにある学校」として重要なことであると考えた。今回の取組みを通して、大学生の参画が学校に大きな活力を与え、その活力は地域にも連動することの可能性を実感することができたことは、これからの本校の教育のさらなる推進力になることを確信している。